

Funai Overseas Scholarship 第二回留学報告書

田中 秀宣

本報告書では2014年7月に渡米してから、2014年12月にHarvardでの第一学期(Fall Semester)を終えるまでの課程をご報告させて頂こうと思います。

サマースクール (2014年 8月)

大学院では非英語圏から留学してくるPh.D課程の新入生を対象に毎年 English Language Program というサマースクールを開講しており、私も参加しました。プログラム期間中は受講者が全員同じ寮に住み、寝食を共にします。ディスカッション中心の授業に加え毎日多くの課題が出されていたのですが、私の個人的なテーマは「とにかく友達を作ること」でした。1ヶ月間、毎日友達とキッチンで料理をしたり、夜遅くまで喋ったりする中で楽しみながら英語や異国の文化に親しむことが出来たと思います。アメリカでの生活のスタートを共にした友達とは今でも数週間に一回は集まっています、現在のPhD生活における大きな基盤になっています。

秋学期 (2014 9月-12月)

アメリカのPhD課程は最初の1年~2年の多くの時間を授業の履修に割きます。秋学期、私は3科目の講義と1科目の研究プロジェクトを履修しました。日本とアメリカの授業の基本的な違いとしては、授業が週に2or3回 合計3時間あること、毎週or隔週で宿題が出ることが挙げられます。私が学部時代を過ごした京大では、徹底的に教科書を読み込み、友人とその物理的解釈や計算過程を議論し理解する、というスタイルが一般的でしたが、アメリカでは「大量の問題を解いて理解する」という哲学があるように感じられました。どちらも一長一短あると思いますが、良く練られた宿題を解いていく中で得られる達成感も爽快でした。また課外では、大学院生が主体となっているコーラスにも参加しました。英語やドイツ語の曲はもちろん、ロシア語やヘブライ語の曲を色々な言語圏出身の友人と歌うのはとても面白い体験でした。Dudley Houseという大学院生のための組織がこのようなサークル、イベントを運営して下さっていることは大学院生活に彩りを与えてくれています。



指導教官(分野)選び

アメリカの大学院では1,2年時に多くの時間をコースワークに割く、というのは噂通りでしたが私が一番力を注いだのは今後のPhD生活を大きく左右する指導教官選びです。学部時代は京大の素晴らしい先生方に惹かれ量子凝縮系、特に超伝導の研究をしていましたが、渡米にあたって「せっかく冒険するんだから、いったん脳みそをリセットして新しい土地の空気を吸って新しい分野に飛び込みたい。」と強く思っていました。そして選ぶ際に指針としたのはとにかく「この”人”と働いてみたい!!!」と”びびっ!!!”と来るかどうかでした。最終的に一緒に働くことになったのは Harvard の応用数学科長を務めているProf. Michael Brennerという統計力学、流体力学の理論を専門とする先生です。オープンハウスでの「とにかくハイテンションで楽しそうな先生が居るなー!!!」というのが彼の第一印象でした。Brenner先生の純粋な好奇心をエンジンにサイエンスを楽しみ 新しい分野を切り拓くスタイルに憧れて共に研究しており、どんどん色々なことを吸収して行ければと思います。